

特別活動を通じた学校の特色づくり

上越教育大学 橋本 定男

はじめに

教育改革期に入り、学校は結果責任・説明責任を問われるようになり、資源を生かした独自性のある教育も求められるようになった。学校が家庭・地域に信頼されるには信頼に足る教育の質と、他校と区別できるよさ・特色の二つが必要になる。このことは、特別活動にとって一番だということだ。とは、筆者の校長としての実践体験からくる実感である。実践を基に、特別活動が特色ある学校づくりや教育の質の向上にいかにかつ与えられるか述べたい。

結論から言えば、特別活動は4つのアプローチで学校の特色づくりを進めることができる。

- (1) 特色ある集団活動、体験活動を通して学校の特色をつくることができる。
 - (2) 特別活動実践の質を高めることで教師の学級づくりを変え、子どもの生活と学びの質を高めることができる。子どもの姿が特色になる。
 - (3) 学校づくりに特別活動実践の手法を生かすことで、職員の主体者意識や経営への参画意欲を高めることができる。経営者の個性が出る。
 - (4) 特別活動を「学校を開く」と結びつけることでコミュニティづくりと子ども参画の学校づくりへの道が開く。新しい特色が生まれる。
- (3)(4)の過程で退職。そこは今後の課題とする。

1 特色づくりと学校づくりと特別活動

校長として赴任してからの学校づくりのプロセスを示す。学校改善の戦略づくりに特色づくりがあり、その方策(戦術)が特別活動である。

- ア これまでの学校の歩み、校風・伝統をつかむ。
- イ 地域の寄せる期待や評価をつかむ。設置者(行政)のそれもつかむ。(後者も必要。ただし内々に、それとなくつかむ。)

ウ 学校の実態(教育課程・教育活動の質的状況、職員、子ども、施設等の状況)、保護者、地域にかかわる実態を把握し、学校としての課題、よさ等をつかむ。

エ 学校、家庭、地域にある「資源」をつかむ。

以上の材料を踏まえ、次のことを考える。

オ 自身の学校づくりの想いを基に資源を生かして

- 目指す子どもの育成、課題の解決に向け、
- 教育改革の動きを見据え、より質の高い教育を求め、学校改善の戦略を練る。

カ この改善戦略の中で「特色づくり」を構想する。

ここで特別活動を視野に入れる。生かす戦術を練る。

キ 改善の戦術として特別活動をどう使うか。

二つの視点が必要になる。すなわち、特別活動を

ク 学校の特色をつくる上でどう使うか。

ケ 教育の質を高めるためにどう使うか。

ここで実践で身に付けた手法やセンスを生かす。

コ 戦術を具体化する。活動を展開していく。その際、特別活動実践の手法や特別活動的「感性」などを使って職員を動かす。特別活動の方法を通じた特色ある学校づくりを進めていく。

2 特色ある活動づくり

(1) 特別活動による特色ある活動づくり

学校づくりとしては、全校をあげての活動を新たに起こすか、従来のものから選んで独自性を強めて特色にするかである。ここで重要なことはプロセスの才を必ずくぐることである。まず、目指す子どもの育成や課題の解決に向けて取組みの戦略を練る。次に、方策(戦術)としての活動をつくる。この活動づくりが特色づく

りになる。あるいは、より質の高い教育を求めて取り組もうとするときに前面に出てくる活動が特色になる。また、「特色」と言われるには次の要件が満たされなければならない。(a) 教育課程に位置付けられ、継続している。(b) 指導体制下で多くの職員がかかわっている。(c) 子ども、保護者、地域に認知されている。これらをクリヤできる領域として特別活動や総合的な学習の時間などがあげられる。ここがプロセスのキにあたり、どう特別活動を生かすか思索する。

特別活動は特色づくりを進める上で、二つのよさをもっている。一つは、学校の抱える課題の多くが子どもの主体性育成や人間関係形成にかかわるものであること。また、育てたい子どもの力として主体的に生きる力や他とかかわる力をあげる学校が多いこと。特別活動は、まさにその課題解決、その力の育成のためにある。

もう一つは、とくに学校行事がそうだが、全校の子どもたちと多くの職員を動かす仕組みをすでにもっていることである。動かすノウハウが積み重ねられている。この仕組みを生かすことで、全校にかかわる活動が円滑に進みやすくなる。このよさに着目し特色づくりを進めた中学校がある。指導主事時代に訪問して出合った。(2) 実践事例「特別活動の特質を生かす」

A 中学校に赴任した校長は特別活動に強い方である。プロセスのウ(実態をつかむ)で、学校の課題「全体に受け身の態度が目立つ。一方で粗暴な言動が多くなってきた」をつかむ。そして「二つの課題は表・裏の関係にある。自分たちで協力して何かをやって喜び合う体験が足りない。だから力が間違った方向で発揮される」と分析する。そこで特別活動を生かして生徒が願いや想いを実現したりよさを発揮したりする活動を充実させることが解決につながると考えた。生徒たちに『自分たちの世界』を保証して存分に力を発揮させ、エネルギーを発散させつつ主体性をはぐくむという戦略である。

学校としての課題解決策のうねりをつくり、協

同方針の下で多様な活動を展開していく。こちら辺りがプロセスのこだ。それが功を奏し、全校生徒による自主的活動『よさこい祭り』が立ち上がる。よさこいの踊りは生徒の熱い支持を得る。新入生への踊り指導や地域行事への参加、施設訪問へと広がっていく。全校が一つになれる生徒主体のツールが生まれたのである。独自の学校文化をもったとも言える。

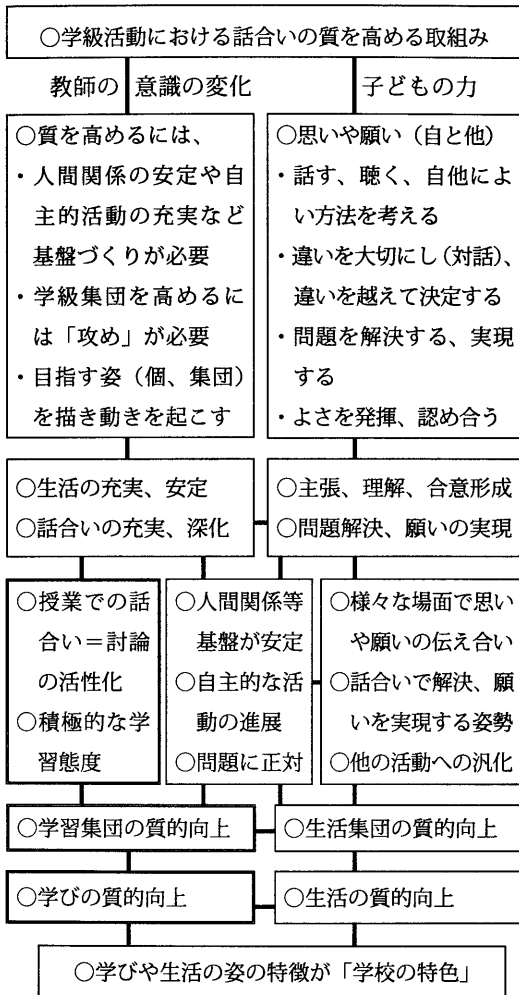
地域住民から「見ていてだけで元気が出る」と高い評価をもらい、自信・自己有用感を持ち、生徒たちは変わっていった。特色ある活動として地域に認知されるだけでなく、生徒の「誇り」となり、祭りと踊りは代々継承されている。

これは特別活動を使って、無から有を生むように特色づくりを進めた例である。特別活動の特質を学校の抱える課題解決に生かす実践であり、示唆に富んでいる。特別活動に強い校長は問題解決の力も強いことが分かる。

3 生活と学びの質的向上

(1) 基軸に学級活動を据えて

ここからは筆者の実践を基にする。学校改善しようとするときの最大の眼目は学校の教育の質を高めることである。質を高めようと戦略を練るとき、特別活動を主軸に入れるという校長は少ないかもしれない。筆者は特別活動を通して学校を変えようという学校づくりの想いをもっている。特別活動を生かすことで、子どもの生活の質を高め、学びの質を高めていくのである。学校をあげてのその特別活動の取組みとしてなにをもってくるか。基軸に学級活動を据えた。とくに内容(1)、子どもによる生活づくりである。この学級活動実践の質を高める取組みを展開することで、教師の学級づくりの意識を変え、子どもに力をつけて学級生活や人間関係の質を向上させていくことを構想した。学級活動が基点となり、学校における生活と学びの質の高まるような動きが活性化していくと期待した。ポイントは話し合いである。構想を図で整理する。



(2) 教師の学級づくりを変える

学級づくりは、つまりは学習集団づくりと生活集団づくりである。さて、筆者がB小学校に赴任したときのプロセス・ウ(実態把握)において、学級づくりの二つの課題がみえた。学習集団づくりでの教師の出過ぎと生活集団づくりでの教師の引っ込み過ぎである。ここを打破することに学級活動の「話合い」を生かす。

①生活集団づくり - 攻める

現状は、学級の生活集団の側面を意識し意図的・計画的に育てようとする姿勢が弱く、個々の子どもの人間性育成や人間関係の在り方や学級集団の質的な構造についてのゴールイメージが

弱い。なにより、学級をこう変えようと手を打つ「攻め」の姿勢が弱い。このことについて、教師自身がこれではラチが開かない、どうしても攻めていかないとだめだと実感することが必要である。ここで打つ布石が話合いの充実への取組みである。学級活動・内容(1)では、子どもが自主的な活動によって生活づくりを進めないと話合いが始まらない。教師から仕掛け、動きを起こし、子どもがその気になるよう働き掛け続けると何も進まないのである。こうして話合いの授業研究を進めていたある日、ある教師が、「ゴールを描いたり学級の問題を考えたりしながら、いろいろ仕掛けていくところが一番おもしろい」と話してくれた。攻めのおもしろさに目覚めたようだった。学級づくりは必然のように「攻め」の姿勢に変わっていった。

②学習集団づくり - 討論

授業において教師の意図的・計画的に進めようとする姿勢が強く、子ども主体の学びが弱い現状があった。子ども主体の学びとは何かが漠然としていて、教師によってばらついている。そこで分かりやすいゴールを示すことにした。子どもだけで発言が続き、追求が深まっていく「討論」のできる授業である。先生の言うことをよく聴くだけの学習を改善することを求めた。指導方法の相当の工夫と指導技量がないと難しい。そのほかとくに求めることはしなかった。

しかし、秋ぐらいから変化してくる。学級活動の話合いを充実させる取組みで学習も生活も含めた話合いの体力強化が進んでいたようだ。授業が変わり始めたことは、校舎を回っているときに教室から漏れてくる声のうち教師と子どものどちらの方が多いかで分かる。子どもの発言が続くように授業が変わっていた。このことは、学級活動が充実してくることで、子どもの人間関係や積極的な態度が育ち、居場所づくりや自己有用感育成などに効果が生まれ、授業の基盤づくりが進んだ成果なのかもしれない。

(3)「話合い」の質を高める

B小学校で目指した話し合いに二つの特色がある。一つは「多数決による収束」を乗り越えて合意形成する話し合いである。違いを越え、分かり合い合意点を探る対話型の話し合いである。一つは生活上の諸問題に正対し解決しようとする自主的活動の中に話し合いを設定したことである。両者それぞれ、子どもに独特の力をはぐくむ。それらの力が他の様々な場面で発揮されることで、学校での生活と学びの質が変わると考えた。

①違いを越え合意形成する力

多様な思いや願いが出て違いが明らかになったときから真の「話し合い」が始まる。違いをどう乗り越えるか、互いが納得する合意をどうつくるか、これを学ぶために話し合いがある。そこで、二項対立の場面を大切にした議題「AorB型の議題」(AにするかBにするかを話し合う)を取り上げる。対立の真ん中から出発し、違いを越えて合意を探るといった話し合いである。よほど深く話し合わないとうまくいかない。うまく指導しないと終始がつかなくなる。“挑戦”だった。この挑戦に学校をあげて取り組んだ。

各学級の話し合いは、大げさに言えば一変した。多数決をぎりぎりまで避け、懸命に着地点を探るようになった。また、相手の意見を代弁したり、解釈してから自分の意見を話す姿が増えた。席を離れ、もっと理解しようと、あるいは折り合いの付け所を探そうと、意見の違う相手と話す「交流タイム」が生まれたのも自然だった。

子どもたちは身に付けた力を学級活動だけでなく、様々な場面で発揮していった。縦割り集団活動や児童会行事などで意見がぶつかったときの対処の仕方が柔らかくなった。また、地域の方々から「このごろ子どものやることや言葉があったかくなった」とよく言われるようになった。このような話し合いの変化が生活の質や授業の場面で学びの質を変えたかどうかの実証はできていないものの、印象ではあるが、子どもたちの言動が温かくなったと思う。このような姿が学校の特色になることが願いだったのである。

このような姿の集積が「温かい学校」という特色になる。

②問題解決力－「傷付く」から逃げない

B小学校では次のような問題提起をした。子どもが生活づくりを進めれば様々な問題にぶつかる。では、自分たちの問題を自分たちで解決するという力をほんとうに育てているか。もしかすると逃げていないか。議題を扱ったのか。学級生活のもつある種どろどろした現実に向き合わせると、やり方によっては傷付く子どもが出る。「傷付く」ことへの不安感、拒否感が強いと、自主的な問題解決の取組みをつくることに腰が引けてしまうのである。しかし、「ちようどうどよい」適切な問題は必ずある。教育的に加工し、子どもを生活現実の問題という土俵にあげてやる努力を避けて、子ども自身による諸問題の解決は進まない。平和志向、安全志向だけでいいのだろうか。学級集団が信頼関係で結ばれるには(ほんとうの「絆」をもつには)、「ちようどよく傷付く」ことを抜いて語れない。

そこで各学級で諸問題を解決しようとする自主的活動をつくる指導を立ち上げ、その取組みの中で話し合いを行うようにしたのである。勇気ある、しかし適切な指導の下、取組みが進んでいった。次のような変化が表れた。

- 5,6年では、何かあったときその場でとっさの話し合いが開かれる場面が見られる。
- 低・中学年では、集会活動の最中にトラブルが起きると、それを話し合う場面が増えた。
- 全体に「～週間」「～作戦」などキャンペーン的な生活向上型の活動が見られる。
- 1年生でも「～実行委員会」が組織され、各学級では係に並んで当たり前になっている。

このような変化から子どもに問題解決の力がついてきていると分かる。力がほんものになって、児童会・生徒会活動に広がり、生活の問題に子どもが向かう実践が積み重なっていけば、学校生活は相当に変わるはずである。変化の途中で退職となったのだったが、ここで願いを言えば、

この力が結集すれば「トラブルに強い学校」ができる。それは「いじめに強い学校」である。そんな特色を打ち出したいものである。

4 今後の課題として

B小学校ではあと二つのアプローチを実践した。一つは特別活動の手法を通して学校の特色をつくることである。学校づくりは特別活動実践によく似ていると思う。もう一つは「学校を開く」である。まず地域に開き、地域コミュニティーづくりに参画した。また、子どもに学校を開き、学校づくりへの参画を試みた。

①特別活動実践の手法を生かす

学校づくりを進めていると、かつて子どもに

特別活動の手法	学校づくりの手法
○主体者の実感を守る ・活動を進める主役は自分たちだの実感を死守する。これが生命線だ。	・トップダウンしたとしても実践主体は教師。この取組みの主役は自分たちだの実感を死守する。
○仕掛ける ・言い出しっぺやリーダーを動かし、望む動きが生れるようにする。	・先生方から声上がるのを待つでは進まない。肩をたたき意気に訴え、望む動きを仕組んでいく。
○根回しする ・表に出る前に必要に応じて働き掛ける。時に対立を仕組む。	・教頭の仕事になるが、大事なことは直に働き掛ける。対立を仕組むことは、さすがにできなかった。
○輪に入り方向を示す ・中に入り一員のように発言しながら、実は思う方向に持って行く。	・会議や研究協議会では一員として議論に加わり、職員の発言を生かして、思う方向へ導く。

やっていたと同じだと思うことがよくある。基本姿勢が全く同じだ。自分の力でやるという主体者意識を守ることである。主役は職員である。表のようにいくつかあげてみたが、このような対比表を作って研究するのもおもしろいと思った。さて、筆者は表の右欄のような手法で学校づくりを楽しんだ。かつての我が学級のように議論の賑やかな、やたらイベントの多い学校になっ

たと思う。「橋本の特色」が出たということだろう。特別活動実践の手法で学校づくりを進めると校長の個性が特色になってよく表れるようだ。

②学校を開く

これからは「学校を開く」ことがますます重要になる。今、地域に開くことが加速しているが、次は子どもに開くことが始まるようになる。いや、もう始まっている。(喜多明人著 2004、『現代学校改革と子どもの参加の権利』学文社)

B小学校では、自由参加の地域懇談会を夜に連続で開催したり、地域住民対象の研究会を開いたり、地域人材と教師の共同参画型の授業をつくったりと、活発に開くことを進めた。

特色となったのは、子ども・保護者・住民・学校の四者による協働事業である。各代表による実行委員会が議案をつくり、四者が一堂に集まる「子ども議会」を開催する。場所は市議会議場である。校庭での住民交流会や地域との合同防災訓練などが取り上げられ、実施されている。大きな特色ある活動として定着している。

新潟市が政令都市になって新たなコミュニティーづくりが始まったとき、地域から学校も推進役に入るように求められた。以来、様々な地域づくり活動にかかわり、地域コミュニティーづくりを通じた特色づくりが始まっている。

一方で、子どもに学校を開くことにも力を入れた。「子どもと語る会」である。5・6年生は全員、3・4年は学級代表、PTA代表、学校評議員、希望保護者が参加する。学校評価アンケートの子どもにかかわる結果をプレゼンしたあと、柱を決めて意見交換し、流れによっては決議する。児童会行事を増やす決議が出たこともあった。子どもたちが学校づくりについて意見を述べ、参画する形をとる動きはこれから強まっていくと思われる。これは特別活動に直結する。自主的、自治的な活動の発展とも解釈できる。21世紀型の特色ある活動が生まれようとしている。もう1回校長をしたいと思う。